

要旨

【目的】 脳血管疾患(以下、脳卒中)後に療養を要する人と生活をする家族介護者が、在宅移行期(退院直前～退院後1ヶ月間)に体験する心理プロセスを明らかにすること

【方法】 研究デザインは、半構成的面接法を用いた質的記述的研究デザインである。対象は、脳卒中により中等度の障害を持つ人と生活をする家族介護者5名以上とし、退院1ヶ月後の時点で、インタビューガイドを用いた半構成的インタビューを行った。インタビュー項目は、介護生活や療養者への思い、自分の人生と介護の両立への思い等とした。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach: M-GTA)を用いて、逐語化したデータから概念を生成し、概念の継続的比較分析によってカテゴリー化を行い、結果図とストーリーラインを作成した。分析の信頼性を高めるために、ニューロサイエンス看護領域の専門家と質的研究の専門家にスーパーバイズを受けた。なお、本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号: 20-A031)。

【結果】 研究に承諾した対象者は5名であった。分析の結果、39概念と8カテゴリーが生成された。(【 】はカテゴリーを示す)

在宅移行期の脳卒中家族介護者は、以前の生活との違いや介護者という役割の意味付けに悩み、その根本的な解決が図れないことで【介護生活の煩悶】を抱えていた。そして【突発的気分変化】に影響を受けながら【その人中心の生活に気が休まらない】中で続く介護生活において、何かをきっかけとして、問題を解決するための資源を探し始めていた。その後、【助けてくれる存在】等の資源を通して【自分の考え方を変える】という思考の転換作業が行なわれ、次第に【介護の楽しみ】を見つかるようになり、退院1ヶ月後にはわずかな【介護生活のゆとり】を感じ始めることで、これから先の人生を改めて考えるようになっていた。これらの心理には【共に歩む意思】が根底にあり、この意思があるからこそ悩み苦しむ一方で、それでも一緒に生きようと思う動機にもなっていた。つまり在宅移行期の脳卒中家族介護者の心理プロセスは、これらの心理の循環の中で【共に歩む意思】を構築していくプロセスであった。

【結論】 脳卒中の後遺症をもつ人と生活をする家族介護者が、在宅移行期に体験する心理について、当事者の語りからプロセスとして表した。その結果、家族介護者にとって在宅移行期は、8つの心理的局面的相互作用によって、後遺症をもつその人と共に生活をしていく上での心理的な基盤を作り上げていくプロセスであることが明らかになった。家族介護者にとって最初の1ヶ月間は、これから介護を継続するための基盤作りの期間であり、感情や考え方が大きく揺れ動きながらも、様々な困難に対応していく柔軟性や思考を転換させる力、資源を確保しようと模索する時期であった。